

新しい駅と新しい町

戸塚区・東戸塚

駅前が整然と並んだミニバイク

昭和55年10月1日、東海道・横須賀線の戸塚駅、保土ヶ谷駅間に設置された東戸塚駅は、地元請願駅、橋上駅舎など、数々の話題を集めてオープンした。それから7年あまりたった昭和63年1月現在、1日の乗降客は平均して5万8000人。今、駅周辺の街づくりが急ピッチで進められている。その東戸塚駅周辺を歩いてみた。

駅前では、真新しい白いビルが建ちならび、枯れ草のこる建設用地には、施工主の立て看板や建築資材がうす高く積まれている。無から有へ、新しい街づくりの創造の息吹を感じさせる光景だ。

広場に面したタクシー乗り場と車道をへだてた有料自転車駐車場には、色とりどりのミニバイクが整然とならんでいる。それが自転車ではなくミニバイクであるところに、新設駅のまわりに広がる新興住宅地のスケールの大きさを見ることができるといえる。

東口から南の方角へ足をむけると、丘陵地帯にひかれたアスファルト道路の左右には、直線を強調してデザインされたマンション風建物が何棟も建っている。1階は店舗、2階以上は住宅といったスタイルだ。1階にははなやかな感じ

のブティック、コーヒーショップなどがなすが、2階以上は、ペランダで洗濯物が風にはためき、ふとんが何枚も干されているといった生活感があり、なんとも奇妙なコントラストをえがいていた。

新駅設置の計画は大正時代から

保土ヶ谷駅と戸塚駅の中間に駅をつくらうとする運動の歴史は古く、東海道線が敷設された後、明治の半ばにさかのぼるといえる。それから30年以上たった大正12年、ようやく新駅設置が具体化し、「武威駅」という駅名もきまり、衆議院を通過した。

しかし、貴族院審議の段階で関東大震災に直面、被害復旧のおおりに陽の目を見ることができなかつた。その後何度か、新駅設置を求める運動が再燃し、計画はもちあがつたが、着工にいたらないまま、たち消えになってしまったという。

こうした地元の人たちの長い念願だった新駅設置は、「ニューシティ東戸塚」というプロジェクトの実施によってようやく実現した。このプロジェクトは、新駅設置と都市拠点の開発をセットで行うとするものであり、ほかの私鉄沿線の開発において一般に行われているものであるが、地元地権者が中心となって進められているところに、ほかとはちがった特徴がある。

こうして「ニューシティ東戸塚」は、横須賀線、横浜新道、環状2号線などの結節点である

■東戸塚「街づくり」のあゆみ

昭和45年	東戸塚品濃中央土地区画整理事業認可(完成57年)
昭和47年	東戸塚駅設置促進期成同盟結成
昭和52年	国鉄横須賀線東戸塚駅設置正式決定
昭和53年	東戸塚西土地区画整理事業認可(完成62年)
昭和55年	国鉄横須賀線東戸塚駅開業
昭和56年	東戸塚駅周辺街づくり開発委員会発足 ニューシティ東戸塚起工式
昭和58年	西口駅前広場供用開始
昭和60年	中央街区、特定街区に都市計画決定
昭和61年	西側街区地区計画に決定 デパート、スーパー進出

交通の利便性を生かした都市開発事業として、いっしょに浮上してきたのである。

さまざまな機能を持った街

「ニューシティ東戸塚」は、3つの地区からなっている。

まず、駅の東側の「品濃中央地区(約59ヘクタール)」では全体計画の骨格を形成する中央街区がもうけられ、デパート、スーパー、専門店などの商業施設、イベント広場、コミュニティセンター、スポーツセンターなどの文化・スポーツ施設、31階建ての超高層住宅などが配置される。その両側には、先端技術企業と緑につつまれた住宅が広がる予定だ。

中央街区の特徴のひとつは、駅西口からのび

Town

るスカイモール(屋上歩廊)。環状2号線にいたるならかな地形を生かしたこの施設は、超高層住宅とともに、新しい街のシンボルとなるだろう。

西側の「東戸塚西地区(約10ヘクタール)」では、東側の大きなスケールにたいして、人間的スケールを採用したまちづくりが行われる。駅前広場を中心とした商業ゾーン、その周辺の業務ゾーン、さらにその外側の研修・住宅ゾーンからなっている。

駅から少しはなれた「上品濃地区(フォレストバレー、24ヘクタール)」では、研究開発施設を中心に、スポーツ施設、住宅の建設が予定されている。

古いものを生かした街づくりを

このような新しいまちづくりが行われている東戸塚駅周辺の地区は、地元では「川上地区」とよばれている。この川上地区は、東海道沿いに開けた村落で、駅周辺には今なお由緒ある神社・仏閣がのこっている。

駅の北方の北天院。南方の白旗神社。また白旗神社の近くには、東福寺、光安寺などの史跡として貴重な寺もある。さらに、駅から北東の方角、旧東海道にある品濃一里塚は、江戸・日本橋から9番目のもので、現在、県内で原型のこす唯一の遺跡としてきわめて貴重なものである。

また、旧東海道の沿線には「らお屋」「金ぐつ

屋」などの屋号を今にのこす多くの家がある。

それだけに、東戸塚駅周辺の急激な変貌に戸惑いをかくせない人も多い。毎日東戸塚駅を利用するという20代の女性は、次のように語ってくれた。

「駅ができて、確かに便利にはなりました。そして、このかわいも近代的なショッピング街に発展するそうで、今から楽しみです。でも古い戸塚のよさが消えていくようでは、その代償はあまりに大きいように、私には思えません」

確かに、新しい街づくりには、地域の姿を大きく変貌させるという犠牲がつけねにつきまとう。しかし、地域の古きよきものを少しでもとりいれながらまちづくりへと生かしていく、その工夫はつねに続けられなくてはならない。



空から見た東戸塚